

者水灾能壞一切乃至第二靜慮三者風灾

彼佛出世教化衆生度人周計於般涅槃而
取滅度佛滅度後有一比丘聰明多智讀誦

三法又於滅諦明三法者二乘之人苦滅之時同於

虛空無有法身無如來藏為對此義故就苦滅明

所有諸行相即請金剛藏大慧顛演說

佛子音樂聞所住第ニ地

无別无斬故善現一切智智清淨故身卑清

以故以不生法非一非二非多非異是故无上正等菩提不生則非凡上正等菩提一切

書道科を卒業後も書道の専攻科に進み、高校の非常勤講師をしながらも、暇な折には、一人で古書店や博物館、美術館通りは続けた。古書店廻りでは、碑法帖拓本の戦前の中国や日本の影印本を積極的に目を向けた。当時、神保町の古書店では、原本はそれほど無く、価格も高く貧乏学生には手が出せなかつた。時間のあるときは、神保町のめぼしい本屋を数軒見てから、水道橋を経て、後楽園の前の古書店により、それから本郷東大前の数軒をみて、上野の博物館まで、また逆に博物館を見てから、上野の松坂屋の横にある二軒の古書店を見て、秋葉原を経て神保町に向かうこともよくした。上野松坂屋の秋葉原寄りに、小さな「広田書林」という古書、書画を扱う店があった。そこでは、時折、小さな買い物をした。当時自分では、いかなる人物が書いたものか知らなくて、自分の好きな、興味を搔き立てられるような書を僅かな小遣いで買い求めるようになつていった。この広田書林で、よく手を出したのは、古写経の断簡である。平安時代から江戸時代辺りまでの古写経である。数行ごとの断簡である。これを少し大きめの白い厚紙に軽く糊で留め、縦に経名が書かれたコピー札が貼られていた。多いときは、こ

うした写経の断簡が百枚近くあった。この中から好きなものを探すのは、楽しい一時であった。朱で句点を付したものもあれば、敦煌經と経名が書かれたもの、紙の色や質も様々、まして書風がいろいろである。天平や平安写経の名品風のものは、高くて手が出ないが、そうでないものは青二才の我々でも十分に求めることができた。その後、帰省の折に京都の古書店をめぐるようになって、東京で求めていた古写経の断簡が、寺町のG書店から出していることに気がついた。当時は、この種の古写経が多くあり、まるごと一巻では、なかなか売れないで、細かく断簡にして売っていたようである。京都では、少し長く一紙分ごとに切られたものもあった。

最近でも、この当時売られていたものが、古書店に再び出てくることがある。こうして求めた古写経の断簡を、書風の好きなものだけを、戦前のなんにも書かれていない白帖に適宜張り込み、古写経断簡集英などと表題を付け、一帖にまとめたことがあった。図版に示したのは、そうした写経断簡の中からやや古そうな書風を示すものを適宜一行ごとに選び、主図版にまとめた。

伊藤滋（書齋名・木鶴室）

「落ち穂拾い記」②

『古写経断簡』

書道芸術院 令和の群像 (2020)



第71回毎日書道展 「ここの中」

大森青風書



大森青風

私は、小学2年の時、近所の習字塾に通い始めました。校内展では最高の校長賞をいただき、また色々な展覧会にも出品し、席書大会にも何度も参加しました。この席書大会の講師として活躍していたのが、三宅素峰先生でした。この時の先生の指導が大変わかりやすく、高校入学と同時に三宅先生の塾に通いました。もちろん高校でも書道を選択しましたが、高校の先生は臨書をしつかり教えて下さいました。三宅先生の塾では先生からいたいたお手本を何度もくり返し書いておりました。白扇会展学生成展に出品してたのもこの頃からでした。高3の時には書道部長もしました。県内の高校生の部で最高賞をいたいたのは、三宅先生のご指導の賜物です。

さて書道芸術院展との関わりは、昭和36年に三宅先生が審査員になられた時から始まりました。私が高校卒業の年でした。当時は「漢字部」で出品し、準特選を受賞し三宅先生らと夜行列車に乗り東京へ行きました。種谷扇舟先生は私たちを温かく迎えて下さり「来年、出品しようと思うものをしっかり頭に焼きつけて帰りなさい」と励まして下さいました。作品は大作ばかりで驚きました。審

査会員候補の時、種谷・三宅両先生が「現代詩文書部」に移籍されたので私も岡山の皆さんと詩文書を学ぶことになりました。講習会には種谷先生、飯高和子先生がよく指導に来て下さいました。しかし、詩文書作品はどう書いたらよいのかよくわかりませんでした。

私はこれまでの人生の中で色々な苦痛や苦難に出会ってきましたが、書道のおかげで楽しかったことや嬉しかったことばかりが心に焼きついており、支えられてきたと思っています。

そして、今ご指導をいただいている小竹石雲先生は、とっても情熱的な素晴らしい作品を書き、三宅先生の亡き後、沢山の会長をつとめてこられました。どこにそんな力が秘められているのだろうと感心すると共に感謝しています。

遠い昔、種谷先生が「小竹君はただものではないよ」と言われた言葉が鳴り響きます。この響きの近くで体力気力が続くまでばつばつ歩んで行きたいと思います。そして58年間出品し続けた書道芸術院展、自分で自分に皆勧賞をあげたいと思います。

書のひろば

理事長
辻元大雲

第73回書道芸術院展審候以上搬入
特別賞選考 春華賞に佐藤菜扇氏

昨年1月の一 般公募・無鑑査作品
別審査に続き、審査会員候補・審査会
員作品の書類搬入が1月17日行われ、
搬入状況は別表の通りとなつた。前回
と比べばほんばいの出品数であった。

部門	審査候補	前回展	審査役員	前回展
漢字部	256	248	178	182
かな部	48	47	51	53
現代詩文書部	243	248	161	171
篆刻・刻字部	21	22	18	20
前衛書部	148	146	105	101
合計	716	711	513	527
増減	(5)		(-14)	

1月27日都美へ作品搬入、28日審候
対象の大賞・準大賞・白雪紅梅賞・俊英賞選考、29日審査会員対象の春華賞選考が行われ、各賞が決定した。

第73回 展春華賞 漢字 佐藤菜園
同 大賞 漢字 木村澄春

(漢子) 坂田華月、(かな) 秋山久枝、
 楽翠、(現詩) 奥村美楓・西城棠花・
 宮戸雲水、(篆刻) 佐藤花梢(前衛)
 石井和子・遠藤紅杏・西條松雲
 向俊英賞

(漢字) 新井春麗・安藤叙孝・伊藤珠己・小野里高堂・加瀬恵子・鎌田恵水・小林藤穂・近藤淑子・田中岳舟・種谷森城・富原扇水・豊田翠玉・永井明香・中谷伯葉・根橋明香・樋井鷹春・深田幽春・本郷谷恵・本多江燕・松田藍華・宮原窓月、(かな) 清水由紀子・高橋はる江・高橋佳子・長谷川千峰、(現詩) 阿部のぶ子・石崎甘雨・大友四峰・柿沼彩香・木下綾華・齋田舞夢・齋藤杏邑・佐久間玉瑛・示野紅遼・武井志保・坪江彩苑・新田雄山・貫名桂峰・芳賀志峻・長谷川翠・藤原利苑・本間文苑・柳川蝶月・吉田景輝(篆刻)伊藤碧水、(前衛)相澤敦子・阿部俊吾・安藤楊風・大竹紅華・川田弘子・工藤山房・清水政子・鈴木栄洋・林美奈子・伏津玲子・山田明子

向春華賞、同候補(A) 赤シールで表示秋季展選抜作家)

(漢字) 青柳明華・朝倉希代子・岩垣若翠・大内熒軒・川村美泉・妻藤江葉・佐藤菜扇・島田白露・種谷悠久・辻川松月・中尾琴麗・西川翠風・西川藤象・前田龍雲・三浦鄭街、(かな) 小島孝予・酒寄光子・佐藤

希雲・田子白嶺・都丸みどり・（現詩）大隅晃弘・大野清玉・大平邑峰・坂本蓉花・坂本龍水・佐藤桂鳳・武山櫻子・寺尾京華・広瀬舟雲・横田江華・（篆刻刻字）加藤觴流・田代明眸・（前衛）一條紅蘿・北村白疏・佐藤華炎・佐藤紅茜・千葉紅雪・塚本真仙・花里智子・鍾匡子・三木彩月・宮崎芳玉

* 秋季展選抜作家はこの他に財団役員（顧問・理事監事・評議員・参事）名譽会員、参与会員（選抜）、過去の春華賞受賞者（木村笙園・佐久間幸扇・千田春月）、新審査会員（74回展昇格者）が出品予定者。

同 春華賞候補（B 青シールで表示）
 （漢字）阿濱浜翠燕・石川溪華・板橋雅邦・大窪翠村・衣田琴草・清遠瑞・高橋潤・谷田熾箋・土屋恵仙・東福青篁・長峯万扇・藤井龍仙・藤原聖美・藤原小翠・森地桂鶴・（かな）箋田祐子・善養寺紅風・利村郁子・松村くに子・（現詩）阿部翠翠・桐岡銘紀・熊谷宗苑・斎藤理舟・田村鄭雲・長島僊雨・畠中弄石・町山美扇・宮本紅雪・若見苑袖・（篆刻）大沼樵峰・（前衛）岩上郁子・大嶋珀暉・大町青蓮・門脇信子・金井みどり・工藤永翠・田村良子・知野洛水・野口加奈

秋季展企画「書道芸術院の書 現代詩文」（会場 アートサロン毎日）
 出品推薦者17名
 現代詩文書部 阿部惠泉・天野白扇・岩崎陽光・大平房子・片岡豪峰・金濱珀暉・菊池富美子・北嶋薈湖・木村笙園・桑原明珠・佐藤弦佳・佐藤初香・鈴木承琳・鈴木英晴・鈴元博

貢・田中扇溪・三宅佳峰
 (アートサロン企画展に出品していた
 だき、秋季展へは出品しない。)
第74回書道芸術院展大作出品者
 (漢) 佐藤え扇、(現) 広瀬丹雲、(篆
 刻) 佐藤明眸
第73回展主要日程

- ・ 2月4日陳列、記者会見
- ・ 会期 2月5日～11日
- ・ 作品解説会 (本年は4回開催)
- ・ 2月5日 (水) 14：00～15：30
- ・ 一般公募、無鑑査上位入賞作品
各部審査主任担当
- ・ 2月8日 (土) 14：00～15：30
- 「書道芸術院の書・かな、篆刻・刻
字、前衛」展、出品17名の作品を中
心として3部門代表役員担当
- ・ 2月10日 (月) 10：00～11：30
- 第1～7室 (特別賞・院賞・毎日新
聞社賞など中心に) 理事長担当
- * 2月11日 (火・祝) 12：00～13：30
- 第1室院役員、大作、春華賞などを
中心として 各部代表役員担当
- ・ 2月9日 (日) 10：00～
- 10：00～ 学生展大賞受賞者、院役
員代表による席上揮毫会
(学生展会場2階)
- * ワークショット (新企画)
- * 2月8日、11日 (10：00～12：00)
学生展会場 (筆文字のカレンダーを
作る) 参加無料。子供参加を是非。

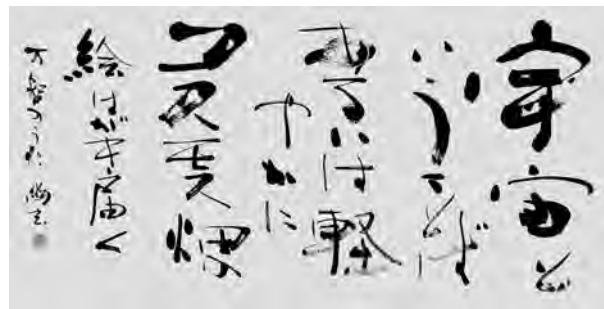
現代詩文書

(五)

高田幽玄

かな(五)

須田清子



「万智のうた」

高田幽玄書

作品の良し悪しについて
作品の優劣の基準とは一体何なのでしょうか？もしそれが明確にありますとすれば、だれにでも容易に判断できるかもしません。古くからある書論というものを読んでみると書いてあるかもしません。書論は、書体、書の技法、書の考証的な研究、そして書品、つまり書の優劣についての考察が主な項目です。

金子鷗亭先生は「遠い昔の書論

を読みでも現代に通用するものは見つからない、現代は現代の書論がなければならない。我々が生きているのは現代なのだから」と言われたことがあります。

現代とは何か、これが私たちの書論の根底になればなりません。現代は大衆化、多様化、国際化の時代です。そして現代書はそれに呼応しつつ、多様な表現性をもって展開しています。展示する場所は個人の住宅を抜け出し、美術館の大壁面や画廊、そしてパフォーマンスのダイナミックな表現とともに様々な場が豊かに広がっています。そこに求められるのはなんらかの強いインパクトです。

私は、院展の特別賞選考委員を務めさせていただいております。言うまでもなく、審査会員レベルの作品ともなると、その優劣を決定するというのは容易ではありません。しかし、つまるところ「強いか」「弱い」の一言にすべてが集約されているように思われます。まず、作品から自ずと発する強いオーラのようなもの、確かな古典からくる隠し味のような品格、そうしたものを審査員は嗅ぎ分けすることが要求されます。審査とは作品の良さの再発見なのです。

21世紀の書 —私の主張—



平成26年書道芸術院秋季展 推薦作家展「大空は」

須田清子書

私は平成26年の書道芸術院秋季展で“かな部”的推薦作家として、毎日アートサロンでの発表の機会を与えられた。まだ勉強途上と思っている中での推挙。しかし、やるしかない現実に直面し、そこでまずテーマを考えた。以前から機会があつたら使いたいと思って

いた全懐紙4枚の継紙を使うこととした。広げてみると、それは四季を彩る立体感を感じさせる料紙。書寫の根柢になればなりません。現代とは何か、これが私たちの書論の根底になればなりません。現代は大衆化、多様化、国際化の時代です。そして現代書はそれに呼応しつつ、多様な表現性をもって展開しています。展示する場所は個人の住宅を抜け出し、美術館の大壁面や画廊、そしてパフォーマンスのダイナミックな表現とともに様々な場が豊かに広がっています。そこに求められるのはなんらかの強いインパクトです。

私は、院展の特別賞選考委員を務めさせていただいております。言うまでもなく、審査会員レベルの作品ともなると、その優劣を決定するというのは容易ではありません。しかし、つまるところ「強いか」「弱い」の一言にすべてが集約されているように思われます。まず、作品から自ずと発する強いオーラのようなもの、確かな古典からくる隠し味のような品格、そうしたものを審査員は嗅ぎ分けすることが要求されます。審査とは作品の良さの再発見なのです。

いた全懐紙4枚の継紙を使うこととした。広げてみると、それは四季を彩る立体感を感じさせる料紙。

書寫の根柢になればなりません。現代とは何か、これが私たちの書論の根底になればなりません。現代は大衆化、多様化、国際化の時代です。そして現代書はそれに呼応しつつ、多様な表現性をもって展開しています。展示する場所は個人の住宅を抜け出し、美術館の大壁面や画廊、そしてパフォーマンスのダイナミックな表現とともに様々な場が豊かに広がっています。そこに求められるのはなんらかの強いインパクトです。

私は、院展の特別賞選考委員を務めさせていただいております。

私は、概念的には理解しているのだが、作品を創作する機会がある度

に、まだその域に達していないのである」とあった。この様な内容

は、自分を痛感するのだ。しかし目前に登らなければならぬ山があることの幸せを感じている。

現代の書 新春展

今いきづく墨の華

(2020)

和光ホール23人展 2020年1月3日(金)～9日(木) 銀座・和光本館6階

セントラル会場100人展 2020年1月3日(金)～9日(木) セントラルミュージアム銀座

主催：毎日新聞社・(一財)毎日書道会

〈和光ホール23人展〉

干支文字



辻元大雲



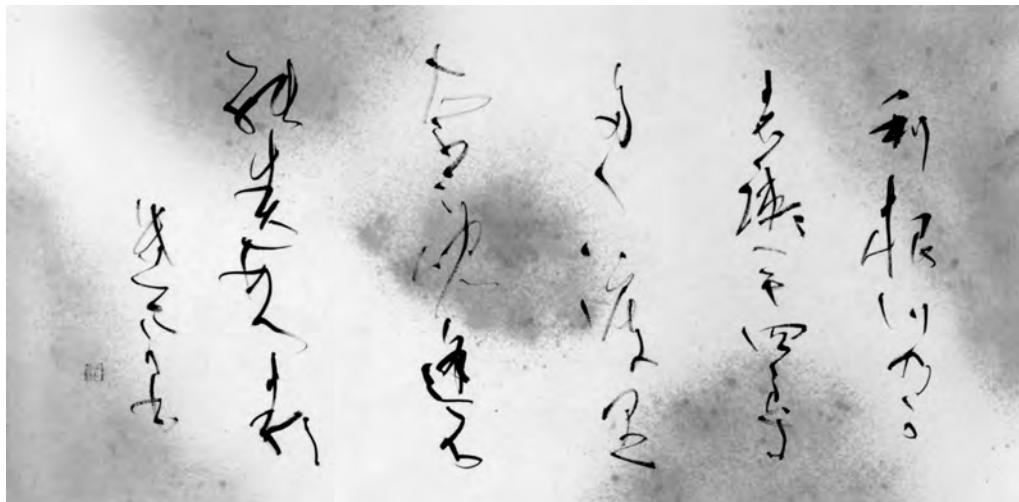
「お降りや」片山由美子句

73×165cm

干支文字



下谷洋子



「出逢い」『万葉集』卷第十四・東歌 作者不詳

66×132cm



下谷洋子先生によるギャラリートーク
(和光ホール)

〈セントラル会場100人展〉

干支文字



「雲につきて」西行『山家集』

69×136cm

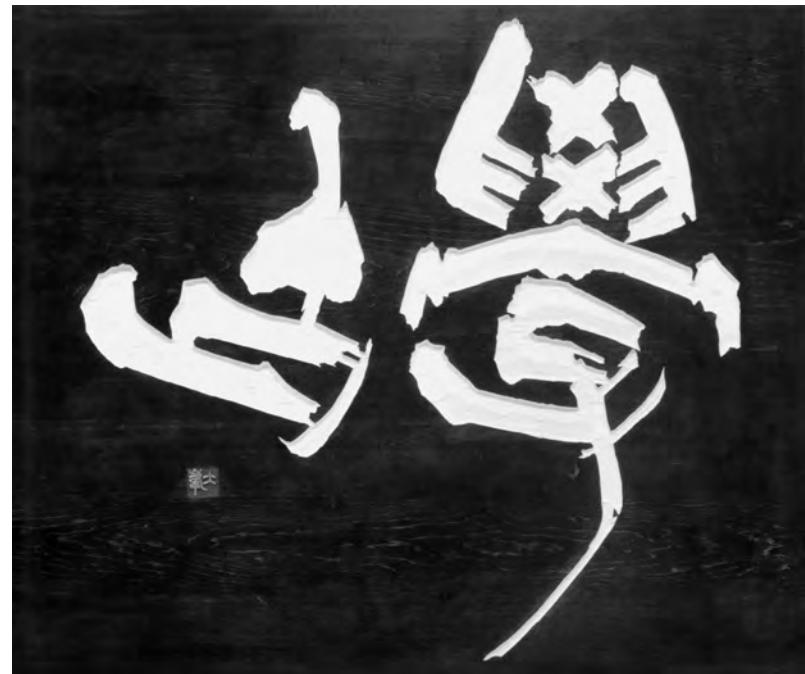
干支文字



「自然」白川 静

60×140cm

干支文字

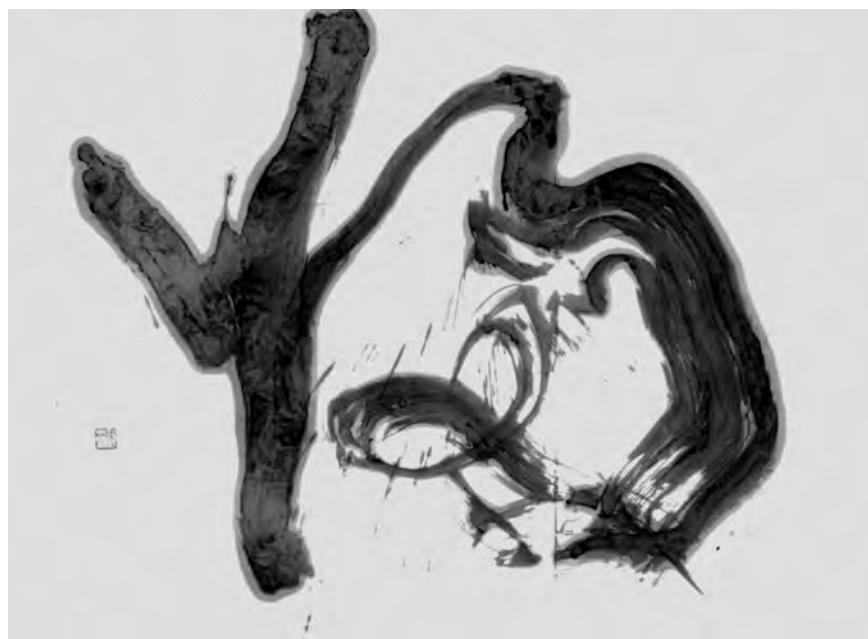


後藤
大峰

「學古」『書經』

59×69cm

干支文字



小林
琴水

「帰」

89×122cm

干支文字



最首翠風



「庭舞新蝶」『萬葉集』梅花の歌序

92×91cm

干支文字



坂本素雪



「都市素描」吉田一穂『吉田一穂詩集』

51×137cm

千支文字



「駕馬十駕」『荀子』



137×64cm

千支文字



半田藤扇先生による作品解説会
(セントラルミュージアム銀座)

半田藤扇



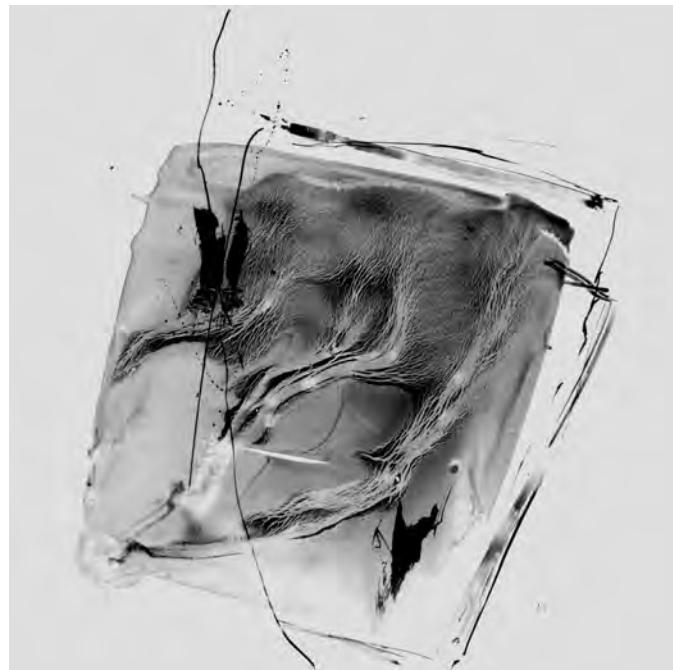
「春江」白居易

56×175cm

干支文字



真下京子

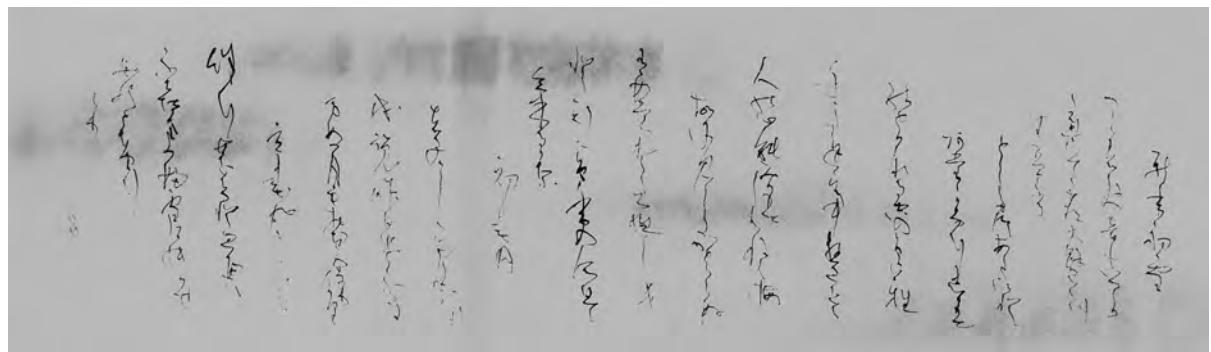


「kakusei-覺醒」

103×103cm

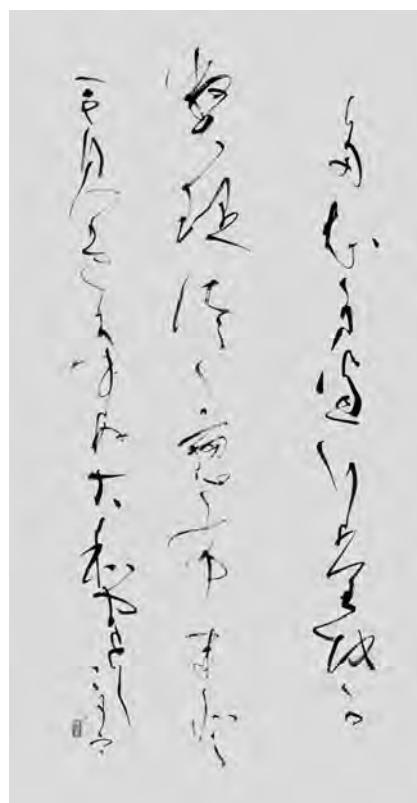
第64回
現代書道
二十人展

<会期・会場>
・東京展 令和2年1月2日(木)～1月6日(月) 日本橋高島屋
・大阪展 令和2年1月9日(木)～1月14日(火) 大阪高島屋
・名古屋展 令和2年2月22日(土)～3月1日(日) 松坂屋美術館
<主催>
朝日新聞社・松坂屋美術館(名古屋展)



下谷洋子「年の始めに／樋口一葉」

53×176cm



「大和恋／土屋文明・續書南集」

下谷洋子

125×65cm

第73回書道芸術院展

併催=第71回全国学生書道展

会期：令和2年2月5日(水)～11日(火・祝)
9:30～17:30（入場は30分前まで）※11日(火・祝)は14:00閉室

会場：東京都美術館（上野公園内）
〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36 TEL 03-3823-6921(代表)

主催：公益財団法人 書道芸術院

後援：文化庁・公益社団法人 全日本書道連盟・毎日新聞社
(一財)毎日書道会

《表彰式》令和2年2月9日(日)15:30～（受付15:00～）
帝国ホテル 富士の間

《祝賀会》令和2年2月9日(日)17:30～（受付17:00～）
帝国ホテル 孔雀の間

《作品解説会》東京都美術館展示会場

①令和2年2月5日(水) 14:00～15:30

対象：無鑑査・一般公募作品（院賞・毎日新聞社賞、準特選展示室を中心として）

②令和2年2月8日(土) 14:00～15:30

対象：「書道芸術院の書・かな、篆刻・刻字、前衛」展作家を中心として

③令和2年2月11日(火・祝) 12:00～13:30

対象：役員作品・大作・上位入賞作品（第1室を中心として）

第71回全国学生書道展

・全国学生書道展指導者作品展示

会期：令和2年2月5日(水)～11日(火・祝)
9:30～17:30（入場は30分前まで）※11日(火・祝)は14:00閉室

会場：東京都美術館（上野公園内）
〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36 TEL 03-3823-6921(代表)

主催：公益財団法人 書道芸術院

後援：文化庁・公益社団法人 全日本書道連盟・毎日新聞社
毎日小学生新聞

《席上揮毫会》令和2年2月9日(日) 10:00～11:00
東京都美術館2階

《表彰式》令和2年2月9日(日) 13:00～（受付12:30～）
帝国ホテル・富士の間

〈ワークショップ〉

令和2年2月8日(土) 10:00～12:00
2月11日(火・祝) 10:00～12:00



礼器碑（後漢・156年）②

古典鑑賞

417

〈解説〉

隸書は、篆書の点画が直線化され、簡素化されて生まれた書体である。その多くは扁平な字形で、点画に波勢（波のようにうねるリズム）があり、横画の收筆や右払いに波磔（大きくうねり、はね上げるように抜いていく筆法）が強調される。この典型的な隸書が、八の字のようく左方に広がった横長の字形から、後に八分（漢隸）と呼ばれ、漢時代の代表体となつた。礼器碑は八分隸の代表的なもので、字形は均整美と均衡美を兼ね備えており、用筆は精妙。運筆は抑揚と変化に富み、線は細くしなやかで峻厳さがみなぎっている。まさに礼器碑に八分隸の完成された姿を見ることができる。（編集部）

※掲載図版65%縮小

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

漢字研究部臨書課題 = (半紙普通判・縦使用) 上記掲載部分より何文字臨書してもよい。

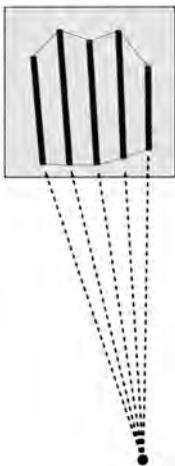
特別研究部臨書課題 = (毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 当該古典の上記掲載部分以外も可。

<よみ>

とり山のもみぢ
あめふればかさ
ばゆきかふ人の
所でさへぞてる

※掲載図版は原寸

<解説>寸松庵色紙の料紙は、中国渡來の唐紙を用い、白・白緑・藍・赤・黄・茶などの地色に、いざれも布目打ちを施して、唐草・瓜・亀甲・雲鶴・花檻などの型文様で雲母摺り、および空摺り(蟻箋)されている。その書は、強韌でリズミカルな筆線、悠然とした連綿の美しさ、巧妙な散らし書きによる構成の美しさなど、古筆切屈指のものである。寸松庵色紙にはさまざまな散らし書きがあるが、そのひとつひとつが絶妙のバランスで空間の美しさを生み出している。一紙に4~6行配し、行頭の高低の変化を繰り返し、行が進むにつれてや左に傾け、1行目の下で各行の流れが焦点を結ぶような構成のものが多く見られる。(編集部)



寸松庵色紙の代表的な散らし書き

(個人蔵)

*「寸松庵色紙」は、たて12cm、よこ25cmの枠(原寸大)を半紙にとり、その中に上記の歌一首を書く。(料紙を裁断して貼付)

*落款を必ず入れる。落款は枠外に書く。
○○臨、印のみも可。(枠外に押印)

かな研究部臨書課題 半紙普通判(料紙可)縦長に使用

特別研究部
臨書課題 (毎日展公募サイズ以内・縦横自由)
上記の掲載以外も可。

寒來暑往
(千字文)



参考作品

篆書は古いほど絵に近く、見てその意味が理解できる。“寒”は（うかんむり）の中に（艸）を敷きつめそこに（人）が座り、下に（氷）がある形。“來”は麦を横から見た形。“暑”は日に照られた形。“往”は（王）の上に（之）をのせた形、王の命令で旅に出るなどをいう。（白川靜著『常用字解説』による）顏真卿は篆書を基に独自の用筆を確立したという。顏法の楷書を参考に載せた。

寒來暑往 よみ（寒來暑往）
カシラフン・オウ

書体＝自由



習い方解説(五)

坂本素雪

見賢思齊
(賢を見て齊からんことを思ふ)

下半分2文字が複雑で画数の多い文字です。全体的には下に重量がある方が安定すると思います。

「見」=「お尻が下がらないように注意。

「賢」=上部を右肩上がりに書いて、貝を組み込ませて下さい。

「思」=心を右肩上がりになるように、また心の3画目は重心に掛けて下さい。

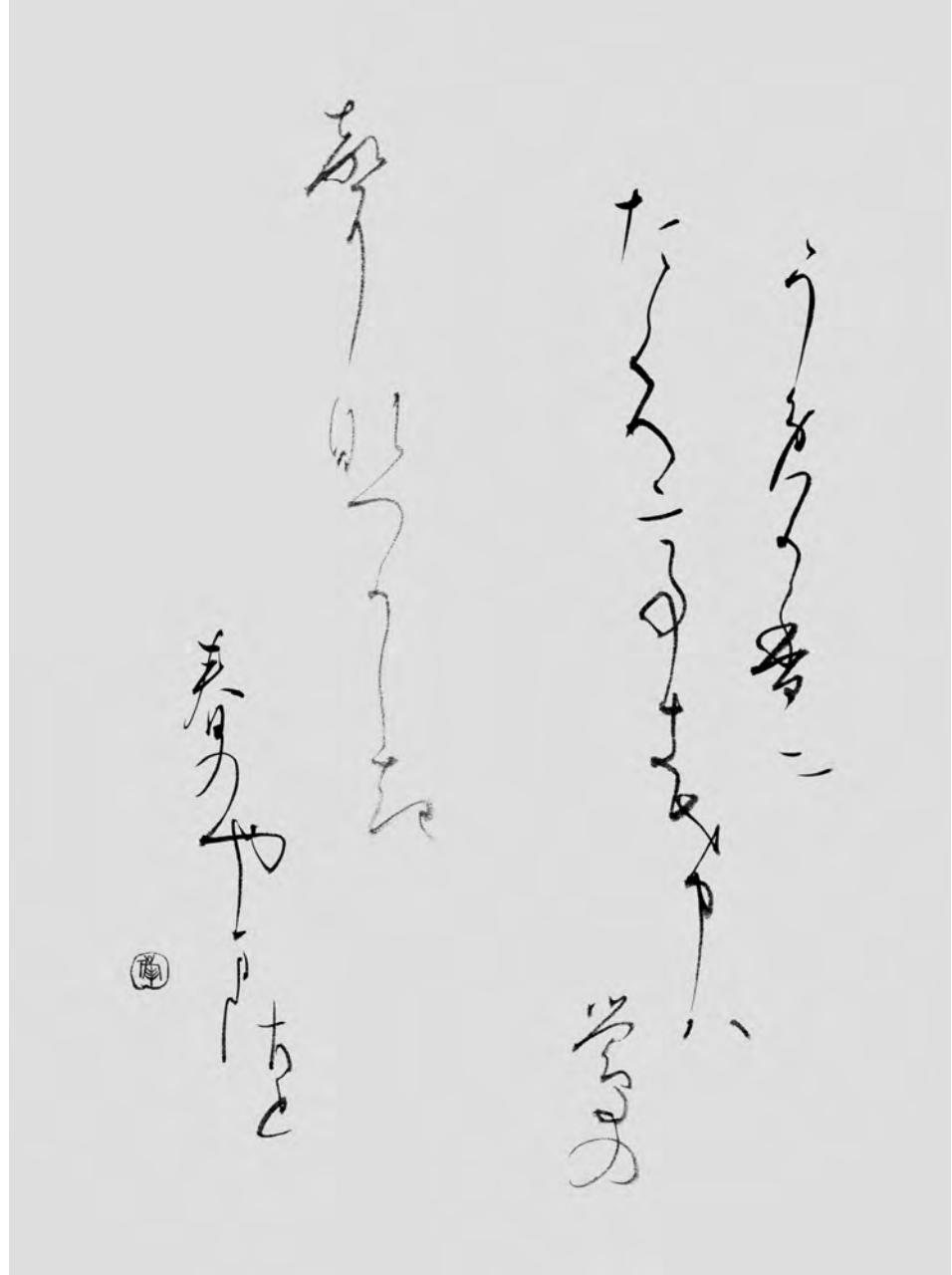
「齊」=これも上部を右肩上がりにして月でバランスをとる。



見 賢 思 齊 よみ(賢を見て齊からんことを思ふ)

書体=楷書

平川峰子



(歌意) 梅の香りにたぐり寄せら
れて来たが鳶の鳴くのも
聞こえてきて嗅覚にも曉
覚にも春の山里は懐かし
い。たぐへては手繰り寄
せての意。

(歌意) 梅の香にたぐへて聞けばうぐひすの
聲なつかしき春の山さと
(西行「山家集」)

連綿はかなの美しさを支える重
要な要素です。この連綿が組み合
わざることで紙面全体に仮名独特
のリズムや流動美が表現されます。
連綿のリズムを会得するには古
筆の臨書が一番です。縦色紙、寸
松庵色紙、升色紙のようにリズム
の他に、行の長短、高低の変化、
行間の広狭も古筆から学べます。
又、連綿は、まっすぐ下に書い
ているわけではありません。連綿
しながら行を左右にゆらしていま
す。是非、平安時代のさまざまな
古筆を勉強してください。

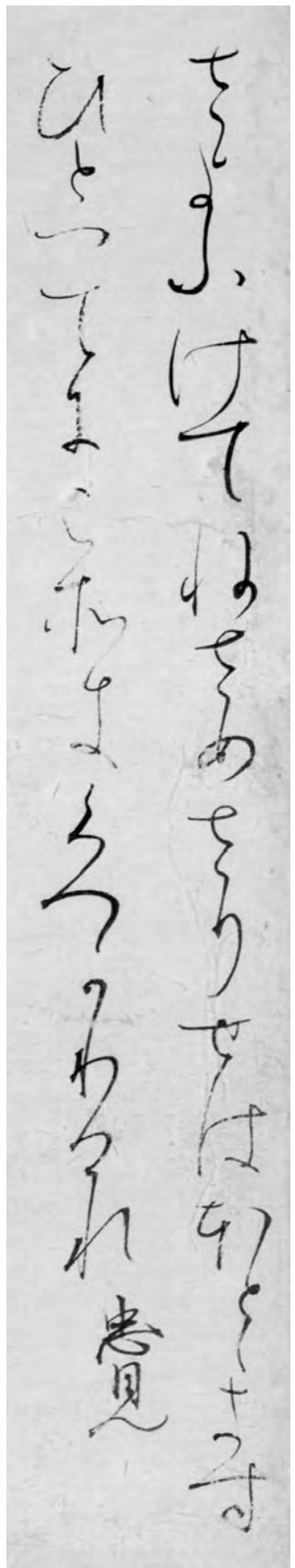
よみ方 梅(う免)が(可)香に(一)たぐ(久)へて(亭)聞(支)け(希)ば(八)うぐひす(鶯)の
聲な(那)つか(可)しき(起)春の山(や万)や(佐)と

創作

かな規定 秀級以下【三月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真的和歌を臨書する。または部分(2字以上の連綿または単体を含む)を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
(掲載写真拡大120%)



よみ方 さよふけてねざめざりせばほ(本)とと(へ)ぎ(支)す
ひとづてに(尔)こそ(所)き(支)く(久)べか(可)り(利)け(介)れ忠見

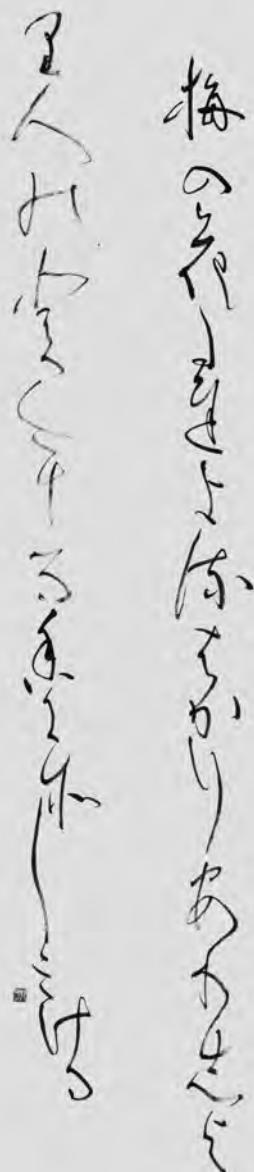
習い方解説 (二)

松 村 くに子

かな条幅規定【三月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切(料紙可)

松 村 くに子選書

梅のはなたちよるばかりありしより
人のとがむる香にぞしみける
(読人しらず・古今和歌集)



よみ方 梅のはな(花)た(多)ち(運)よる(流)ば(者)かりあり(利)し(志)よ(與)り(里)
人の(能)と(登)が(可)む(牟)る(留)香に(尔)ぞ(所)しみ(二)ける

創作

* タテ形式に限る
みを、

辻元大雲

青雲有路千峯見
碧海無波萬里開
（青雲路有つて千峰見れ
碧海波無くして万里開く）
（潘及甫）
海無波萬里開
甲子雲乙

書体＝自由

七言一句二行書の最後です。対句表現ですので分かりやすい内容かと思います。少し連綿が入っていますが、平易な表現としました。
漢字条幅表現の場合、字体はぼぼ書写体、旧字体を使うことが多いですが、簡略体となつた常用漢字は避ける場合が多いと思います。「万・萬」「声・聲」「所・處」など色々ありますが、混用は避けたいと思ひます。

* タテ形式に限る

漢字条幅規定 秀級以下【三月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

崎井恵風選書

習い方解説 (五)

崎井恵風

梅花帶雪飛琴上柳
色和烟入酒中 恵風書

書体＝自由

梅花雪を帶びて、琴の上に散りかかり、柳の色は煙かとも想われて酒の中に映づる。早春の情景です。

王羲之の「蘭亭叙」を参考に、14. 文字の二行書を課題としました。文字の大小・潤渴に気をつけて挑戦してください。

梅花帶雪飛琴上柳色和烟入酒中 恵風書
(梅花雪を帶び琴上に飛び、柳色煙に和し酒中にに入る)

山田梓江

百人一首は一番の天智天皇
から百番の順徳院まで、おお
むね時代順に配置されていく。
歌人の生涯や背景を知る、
とが出来る。

梓江書



用紙=はがきの大きさ(14.8×10cm)、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

一番の天智天皇(626~671)は大化の革新で有名な中大兄皇子であることはご存知だと思いますが、復讐のつもりで記します。中大兄皇子は朝廷で権力を振っていった蘇我入鹿を滅ぼし、皇太子となって朝廷の改革を行い、日本初の戸籍台帳を作り律令体制の基礎を作った人です。

一番から百番の順徳院(119~124)迄の時代は、500年間以上もありますが、定家はその間に詠まれ資料に残っている何万首からなる膨大な和歌の中から僅か3か月間で寝食も忘れて?最高の百首をピックアップしていくのですから、そのバイタリティは凄いものと驚かされます。どのようにして撰んでいかれたのかを想像すると、書籍の中に埋もれているお姿が浮かんできます。順徳院については次の3月号で最後の解説で記述します。

今月の

ホープ作品
各部総評 No.704

ペン字部 師範 鳴下 真妃
洗練された見事な行書体。ペン
先を活かし切った繊細な線条で、
まさに気品あふれる作品です。

◎ペン字部総評 漢字かなのバラ
ンスと行間余白を留意することで
作品全体が引き締まります。常に
デフォルメを大切に。（孝子評）

定家は七十三歳で出家し、
和歌の研究などして、た時に歌会に招かれ、そのとき
宇都宮頼綱に依頼されて
百首を撰んだ。（真妃書評）

かな条幅部 師範 松本 泰子
かな条幅部 師範 松本 泰子
完成度の高い文字に加え、筆墨
の選択が的確で申し分がない。

◎かな条幅部総評 初句漢字3字
に捉われ、字粒のバランスを失
たものが目立ち残念。総合的に美しい
作品を目指すこと。（明子評）

漢字条幅部 師範 土居 京仙
やや厚手の紙質を生かし、柔ら
かで暢びのある表現に好感。おだ
やかな行書の表情とよく調和する。
◎漢字条幅部総評 上級一行書き
平凡作多し。下級の一行書を含め
多様な表現、書風の変化など研究
を更に継続して欲しい。（大雪評）



前衛書部 特選 木原 尚子

凝縮された構成、線、墨色で虫
めがねで一点に太陽光線を集めた
様な深淵な作。にじみの効果大。

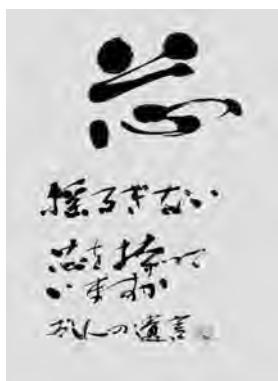
◎前衛書部総評 用具、用材の工夫
した作品も見られましたが、書
的エキスと気品が大切。（京子評）



現代詩文書部 特選 武山 花源

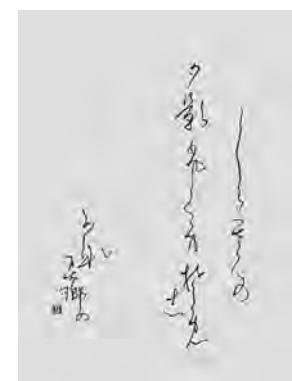
墨色に配意しながら過剰な表現
を抑え、言葉が胸に沁み込んでく
る味わい深い作品となつた。

◎現代詩文書部総評 日頃の漢字
やかな学習を生かした作品作り
を目指して欲しい。（岳峰評）



かな部 師範 近藤 淑子

リズムの緩急が見事です。かな
にはこのリズム感が不可欠、さら
に手本に依らず創作に挑戦したい。
◎かな部総評 字数の少ない俳句
はバランスの取り方が難しいよう
です。大き過ぎや委縮は美しくあ
りません。楚に注意！（洋子評）



漢字部 師範 佐々木千芳子

毫毛長鋒を駆使した現代的な隸
書作品である。配字に難のあるの
が惜しまれる。

◎漢字部総評 副手本により造像
風の書に初トライした人も多々あ
たようだ。勉強になつたと思う。
下級楷書も線は様々だ。（翠風評）

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 辻元大雲 半田藤扇 大辻多希子 倉林紅瑠

漢字
(八街)

神保清風 「岳陽晚景」



神保清風書

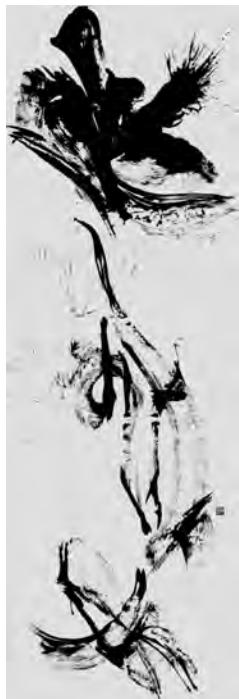
170×55cm

◆40文字の長文を歯切れのよいタッチでリズムに乗り、巧みな筆さばきで見事に書き通す。若さを感じ。

(藤扇評)

◆抵抗感のある紙面に、強い確かな筆線が冴え筆力がこもる。穏やかさと、減り張りの利いた書美。

(多希子評)



前衛書

(篤信)

三浦朱鳳 「初春の光」

180×60cm

三浦朱鳳書

◆上部から中央部への冴えある潤滑の変化と運筆のリズム・流れが魅力的。下部の造形処理は一考を要す。

(紅瑠評)

◆超濃墨の質感を生かし、鮮烈な潤滑の変化で印象的な作となる。下部の交差が邪魔な感あり。

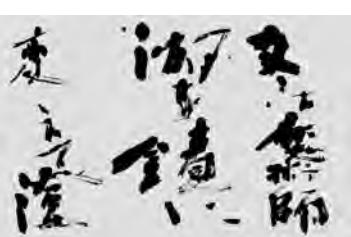
(大雲評)

◆超濃墨と長鋒筆で一気に書きあげたように感じる。白の紙面に線が響き渡るのは心の叫びなのだろう。

(藤扇評)

◆上部の濃墨を四方に発散し印を込めて、紙を削り碎くような細線が生きる。

(多希子評)



180×60cm

市川紫泉書

◆切れ味鋭い運筆のリズムが行の貫通性に影響し、充実、気迫の作となつた。下部やや甘さを感じ。

(大雲評)

◆2×6尺に3行構成。巧みな筆捌きから生まれる多彩な線条と歯切れよい運筆のリズムが心地よい。

(紅瑠評)

◆情緒豊かな表現で、変化とリズムを醸し出す。行間の美しさの絶妙度は間の取り方からの効果なのか?

(大雲評)

◆潤滑、大小の文字鮮やかに描いて、奥行きをもたらしている。芯のある強い線が抒情的な世界を表現。

(多希子評)

◆エネルギー感の強さを致して、横展開した作。空間処理が巧みで、余白も美しく雄渾さ溢れる堂々の作。

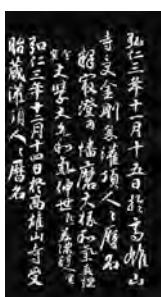
(紅瑠評)

〔臨書〕(紅瑠) 相澤敦子
「灌頂歴名」



70×135cm

部分拡大



現代詩文書 (もくせい文)

西川藤象
「夏目漱石の句」



180×60cm

西川 藤象書

◆大胆な筆の開閉で強烈なインパクトを發揮する作。やや粗さを感じるが、気力気迫の姿勢を買う。(多希子評)

(大雲評)

◆躍動感あふれる筆線と、思い切りこもり庄巻。律動感あり巧みな筆捌きが紙面を走っている。(多希子評)

(藤扇評)



180×60cm

西川 藤象書

西川 藤象書

創作の部(45点)	前衛――0点
漢字――5点	漢字――22点
かな――2点	かな――12点
現代詩――16点	現代詩――21点
臨書の部(23点)	臨書の部(23点)
漢字――1点	漢字――1点
かな――1点	かな――1点
前衛候補者	前衛候補者
創作の部	創作の部
漢字	漢字
現代詩	現代詩
前衛	前衛
大雲	大雲
小倉	小倉
梅扇	梅扇
かな	かな
成山	成山
高橋	高橋
伊澤	伊澤
香雨	香雨
秀恵	秀恵
阿部	阿部
うる	うる
今関	今関
蓮紅	蓮紅
浅野	浅野
彩紅	彩紅
愛香	愛香
大和	大和
愛香	愛香
紅瑠	紅瑠
栗原	栗原
佐藤	佐藤
成美	成美
雅悠	雅悠
心華	心華
壇	壇
遊	遊
樹原	樹原
紺野	紺野
甲信	甲信
御子柴	御子柴
白井	白井
華祥	華祥
加藤	加藤
和栄	和栄
英峰	英峰
吉瀬	吉瀬
池田	池田
沙静	沙静
彩雨	彩雨
和栄	和栄
かな	かな
清月	清月
境野	境野
和子	和子

総出品点数
68点

◆紺紙に金泥で原帖の自然な変化、リズム感を見事に表現。細部までの観察眼の高さ、努力に敬服。(多希子評)

(大雲評)

◆空海の灌頂歴名、重要な古記録を紺紙金泥で表現されるとは何とも惜い作品。終始一貫された堂々作。(藤扇評)

(藤扇評)

〔前衛書〕(容洲社) 阿部邑里「新春」

(紅瑠評)

◆紺紙に金泥を用いての臨書、一点一画を最後まで乱れのない臨書に敬服しました。 (多希子評)

◆藍紺紙に金泥墨を駆使した全臨作品。古典に真摯に向き合い、その特徴を着実的確に捉えた。最後まで集中した臨書態度は見事。

(紅瑠評)

◆筆の回転による飛沫が効果的。上部から下部への潤渴を活かしたりズムが魅力。余白も美しく、現代的で爽快な作。(紅瑠評)

◆紙面を踊り跳ねるリズムが面白い。飛沫が独特の効果を生み出している。下部やや繁瑣か。(大雲評)

◆円回転をしながら颯爽と紙面を駆け抜ける。余白は明るく、控えめな飛沫は秘めた躍動を感じる。(多希子評)

〔漢字〕
〔臨書の部〕
樹原紺野遊山
甲信白井
御子柴
華祥和栄
英峰吉瀬
大雲池田
紅瑠彩雨
加藤和栄
和栄
かな
清月境野
和子

漢字研究部
(灌頂歴名)

選評 名越 蒼竹

今月のホープ作品



鷺山 美梢

漢字研究部 特選 鶩山 美梢

灌頂記の小さく書かれた文字を正しく書くのは案外難しい。この作品は大きい文字のボリューム感、小さい字の気楽さを双方表現出来ているばかりでなく、紙面のバランスも良い。特に「羅」を正確に書いているのは立派。

◎漢字研究部総評

今回文字の正確性について問題が多かったことは残念です。課題古典は書簡以上に卒意

の書。人に見られることを意識しないで書かれたメモですから、筆脈がよく分からない字が多いと思います。このような時、見たままに書かず、面倒でも字典を確認して一番似ている崩しから推測し、筆脈を確かめてから臨書するようにしましょう。その点課題全体を臨書した作品はよく調べて書かれたものが多く、臨書姿勢の範たるべきものでした。



虚龍惠真萩祥美
拙峰子薰雨扇

律智弘国蒼雅
子景子子風泉

岳雅 陸淳四
舟悠 月子峰

紅清敦遊四杏
苑耀子山草邑

かな研究部
(曼殊院本古今和歌集)

選評 勝山初美

今月のホープ作品



齊藤杏邑

かな研究部 特選 斎藤 杏邑
たっぷりとした墨量から自然に淡く細く、ゆった
りとした高貴な香りを漂わせて います。おだやかで
美しい線質が表現され、技量の高さが窺えます。
◎かな研究部総評

幸舟泉子

幸
代
惠

良和美
加泉子子

芳清惠
枝耀美子

芳明蓮東華幸黎や華玉竹八春墨桜春澄生大白生誠澄正上姫白青高澄薈大千大春た四立翠や琇華白
選外蘭漢紅伯仙扁明ま仙川美街汀宣草汀春大雲露大和春華泉路露蓮陵春田阪葉阪汀か枝精柳ま韻仙露
墨祥土正竹若明縁紫氣華原葉漢